台湾総統選挙
7回の概括

東京外国語大学　小笠原 欣幸

報告のポイント

1. 最初に，総統選挙の位置づけ，争点，分析の枠組みをお話します。
2. 次に，その枠組みで7回の選挙の構図を簡潔に紹介します。
3. 最後に選挙データから四半世紀の変化を提示。

総統選挙の法理と実態

7回×25年の蓄積⇒認識の変化

中華民国総統選挙 ⇒ 台湾総統選挙

法理上は「中華民国総統選挙」 ＞ **実態**は台湾のトップを選ぶ台湾総統選挙 ＞ しだいに「台湾総統選挙」と呼ばれ認識されるようになった

法的位置づけ

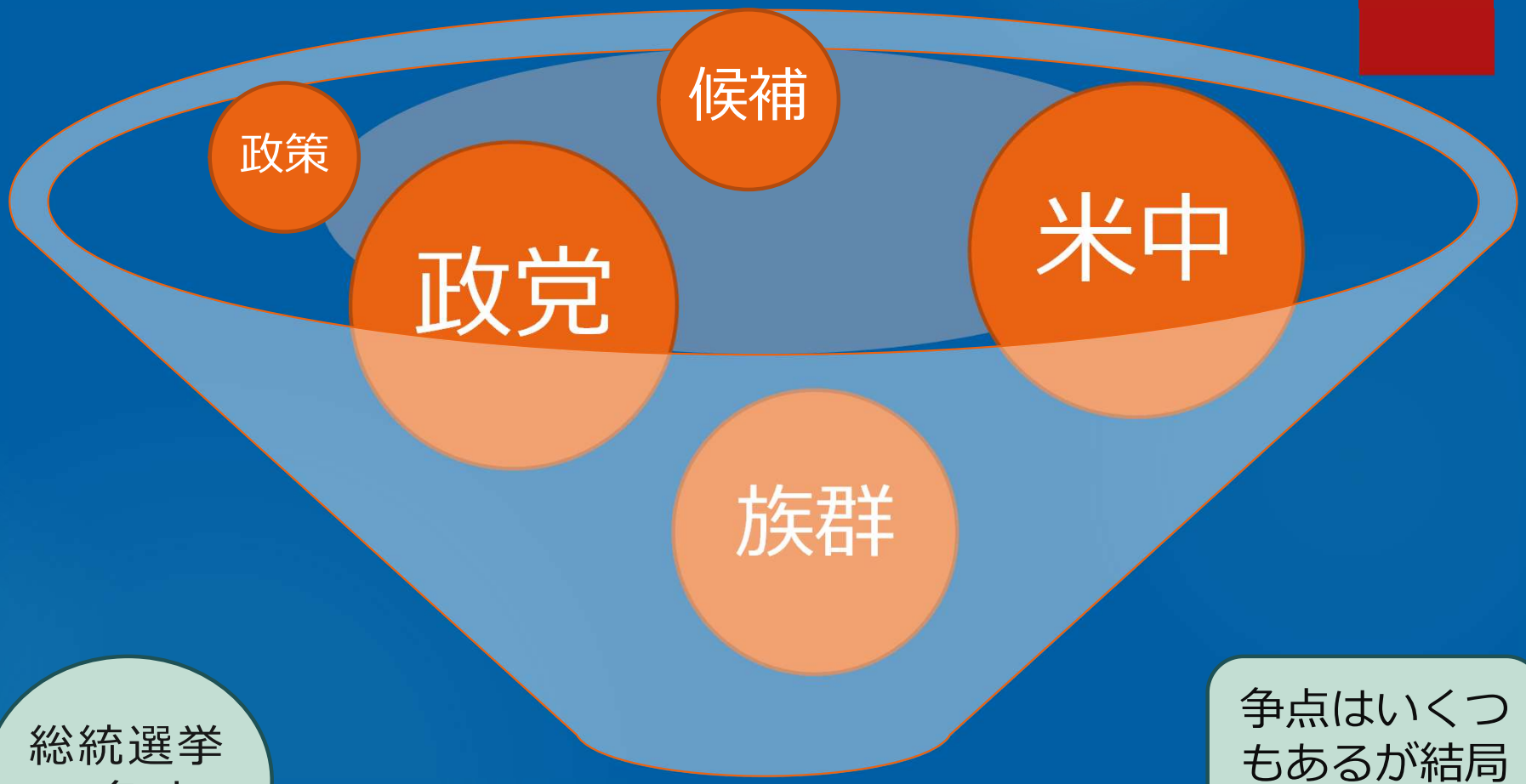
- 総統は中華民国自由地区全体の人民の直接選挙による（中華民国憲法増修条文）
- 選挙区は「中華民国自由地区」＝「台湾地区」（総統副総統選挙罷免法）

「台湾地区」の定義は台湾,澎湖,金門,馬祖（両岸人民関係条例）

蓄積

法的位置づけは今でも変わらないが，四半世紀の積み重ねで実態ができた

人々の意識の変化



総統選挙
の争点

争点はいくつ
もあるが結局
はここに収斂

台湾のあり方

台灣應有的狀態

総統選挙７回の全候補者と当選者

	選挙年	民進党	国民党	親民党	無所属	無所属	新党	候補者数
1	1996年	彭明敏	李登輝		林洋港	陳履安		4
2	2000年	陳水扁	連戦		宋楚瑜	許信良	李敖	5
3	2004年	陳水扁	連戦					2
4	2008年	謝長廷	馬英九					2
5	2012年	蔡英文	馬英九		宋楚瑜			3
6	2016年	蔡英文	朱立倫	宋楚瑜				3
7	2020年	蔡英文	韓國瑜	宋楚瑜				3

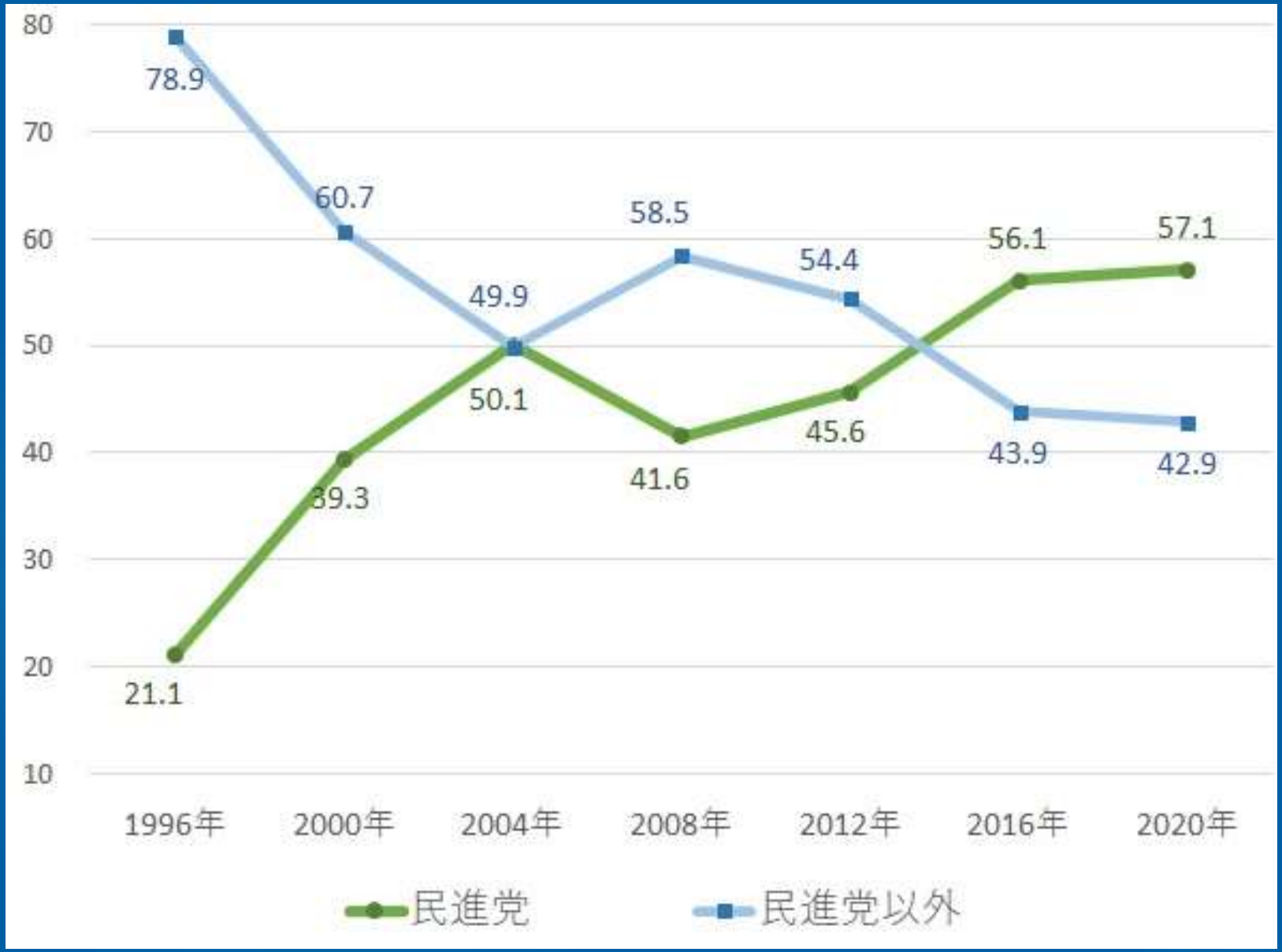
1回目と2回目は候補者が比較的多かった。しかし，3回目と4回目は完全な一騎打ちとなった。

5回目から7回目まで毎回３人の候補が出馬した。二大政党プラス１の傾向は定着しつつある。

７回の選挙で民進党候補が４回当選した。

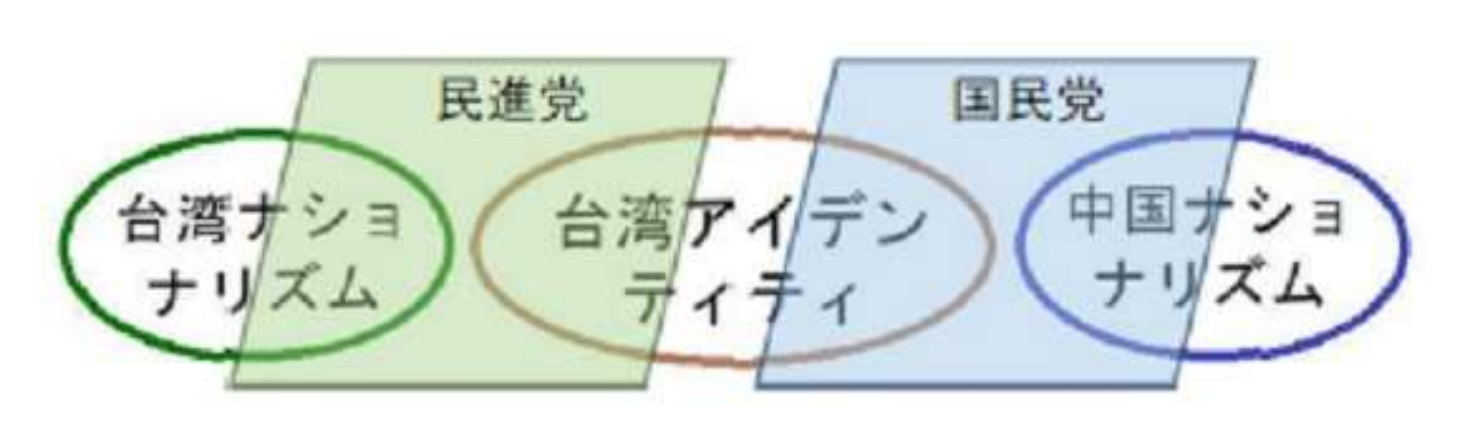
総統選挙における各陣営の得票率の推移

総統選挙1996-2020年の長期トレンド
民進党と「それ以外」の勢力比



総統選挙の四半世紀の長期トレンドは,「国民党の絶対的優位から民進党の相対的優位への転換」

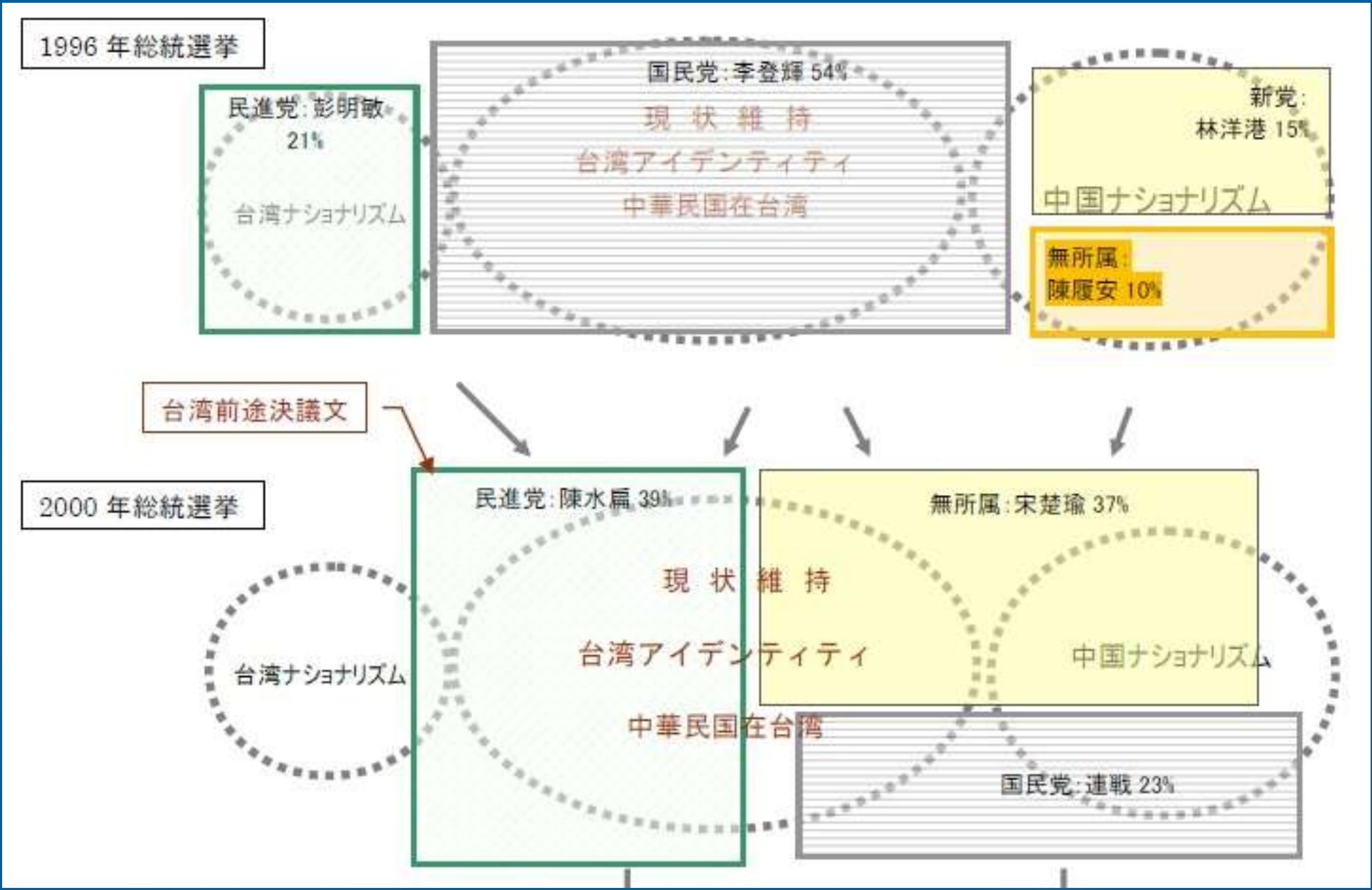
台湾の3つのイデオロギー（政治的立場）と二大政党の支持構造



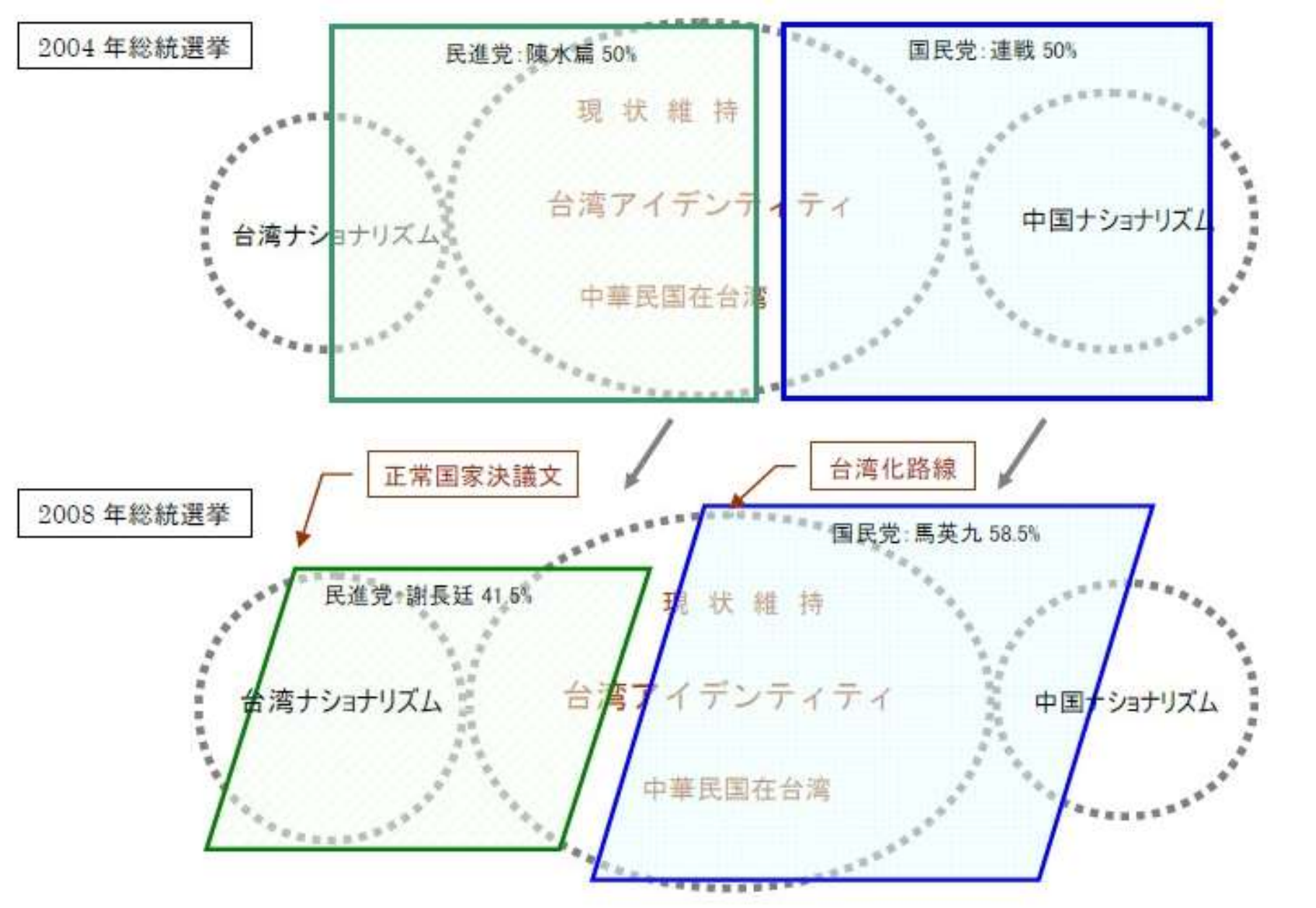
台湾のイデオロギー（政治的立場）は，台湾ナショナリズム（独立派），中国ナショナリズム（統一派），そして2つのナショナリズムの中間にあるゆるやかな「台湾アイデンティティ」の3つ。

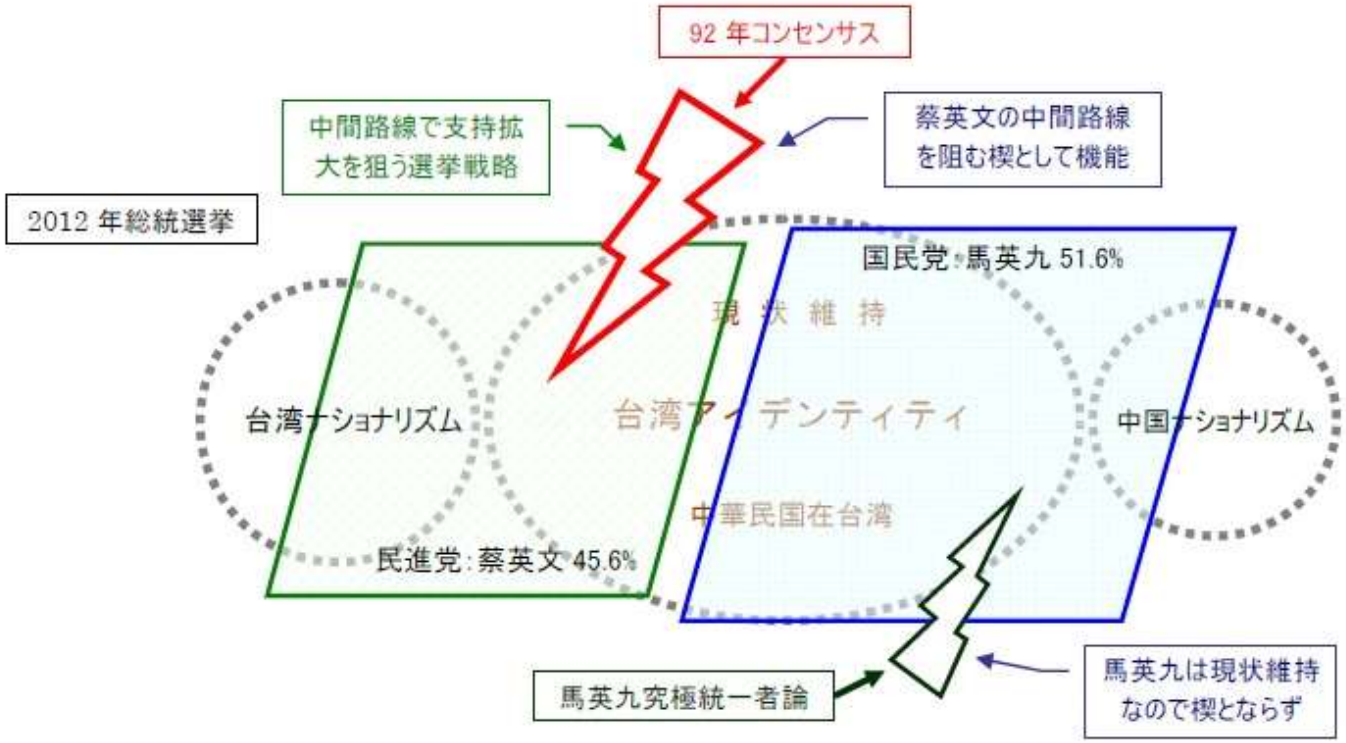
「台湾アイデンティティ」は，民主化・台湾化した中華民国の枠組みで現状維持という政治的立場。

総統選挙におけるイデオロギー・政治的立場と支持構造（1996年-2000年）

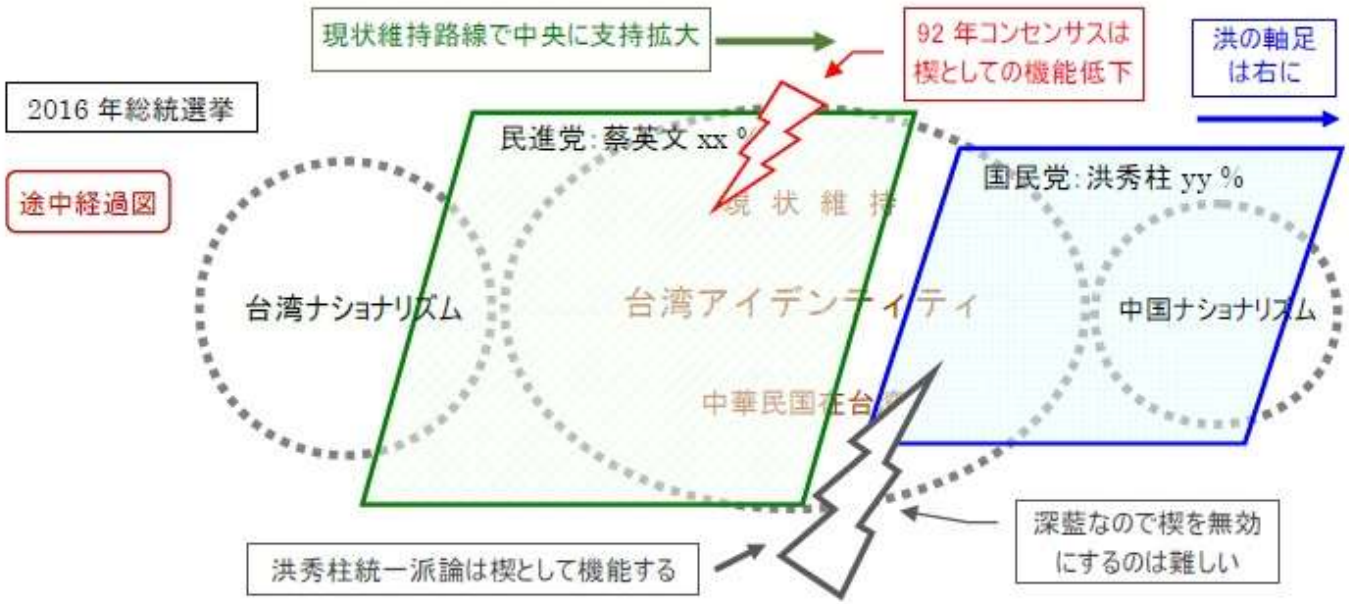


総統選挙におけるイデオロギー・政治的立場と支持構造（2004年-2008年）





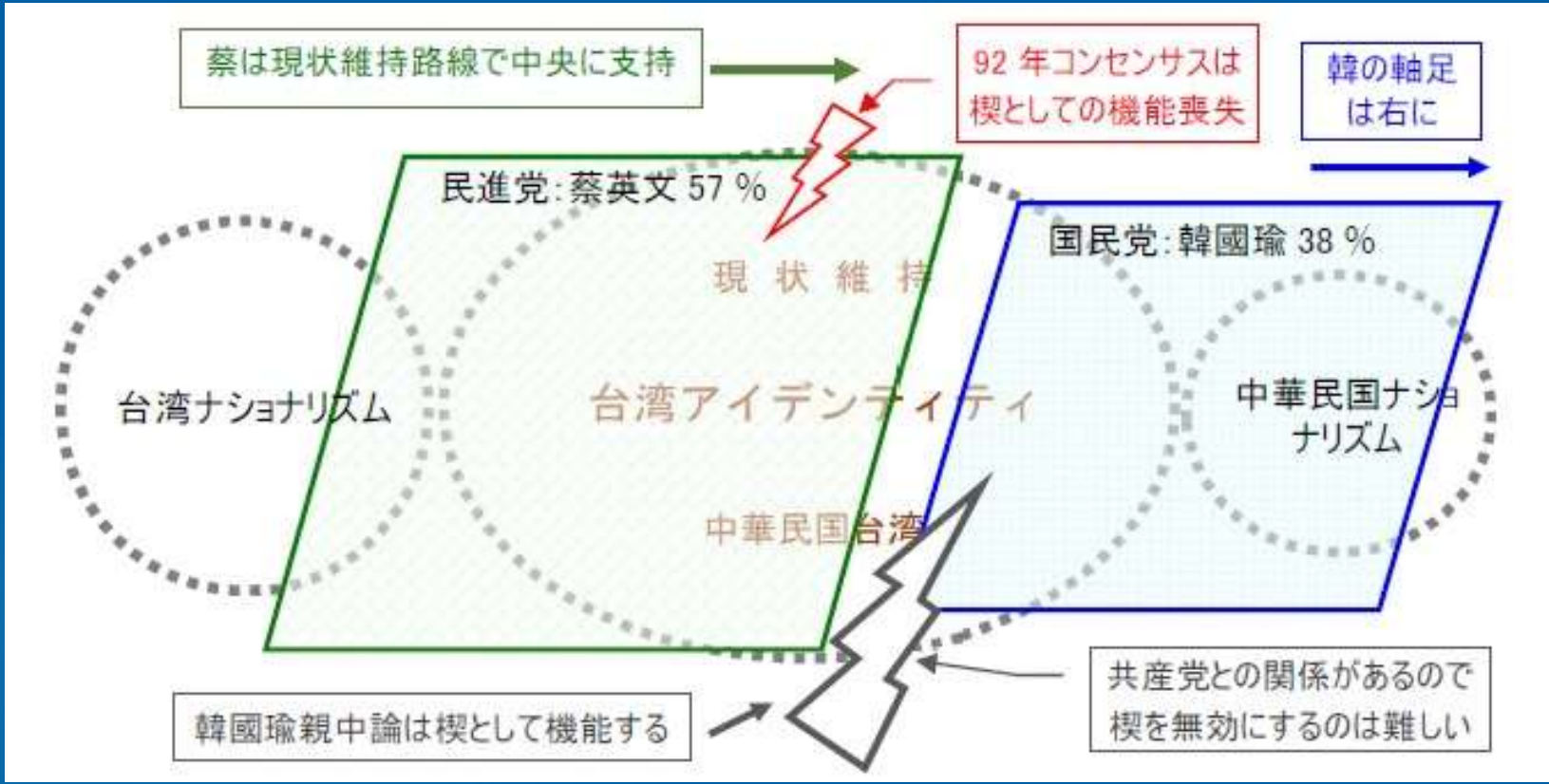
2012年選挙



2016年選挙

総統選挙におけるイデオロギー・政治的立場と支持構造

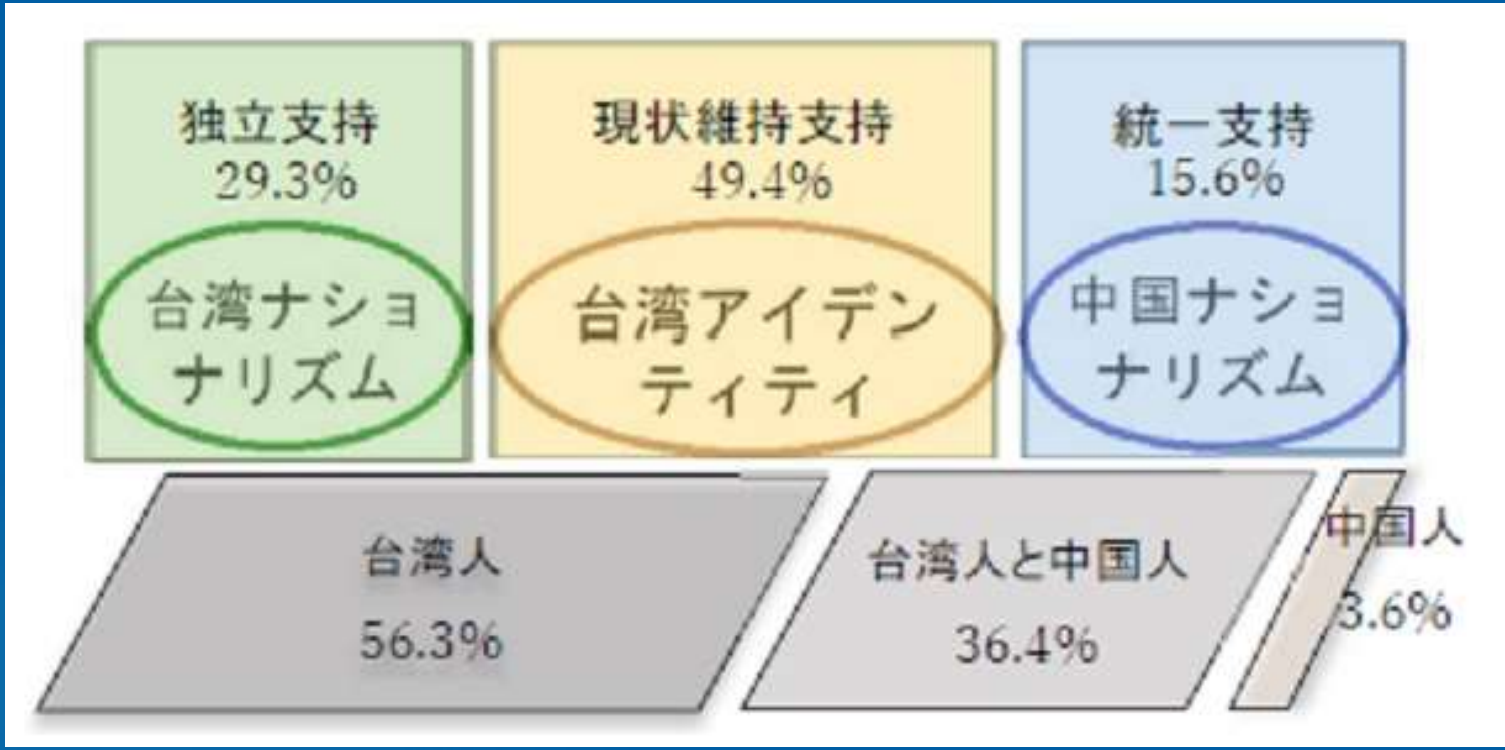
2020年選挙



このように候補者・陣営のポジショニングを見ることで選挙の構図を説明することができる。これは過去7回すべてに当てはまる。

台湾の3つのイデオロギー（政治的立場）と台湾の前途・自己認識の支持構造

数値で把握



①台湾の前途について，「独立」，「統一」，「現状維持」のどれを支持するかという調査。最も多い回答は「現状維持」で，次に「独立」，そして3番目に「統一」で，支持率は過去10年間比較的安定している。

②台湾民衆の自己認識について，「台湾人」「中国人」「台湾人でもあり中国人でもある」のどれかを選ぶ調査。多くの調査があるが，1992年以来の蓄積がある政治大学選挙研究センターの調査が最も信頼性が高い。

政治大学選挙研究センターの「統一/独立」調査データを用い，独立・現状維持の支持率グラフを作成する。そこに民進党の7回の得票率を重ねる。さらに民進党の得票率の近似線を引く。

（a）

民進党は台湾ナショナリズムに頼っていたなら今日の支持は得られていなかった。

（b）

現状維持（つまり台湾アイデンティティ）の半分以上の支持を得ないと選挙で勝てない。

政治大学選挙研究センターの「台湾人/中国人」調査データを用いて「台湾人」の回答率のグラフを作成する。そこに民進党の得票率を重ねる。さらに民進党の得票率の近似線を引く。

（c）
民進党は台湾アイデンティティの潮流に乗って勢力を拡大してきた。

グラフから読み取れる長期トレンド

民進党と「それ以外」の得票率のグラフ

- 総統選挙の四半世紀の長期トレンドは，「国民党の絶対的優位から民進党の相対的優位への転換」

台湾の前途・自己認識のグラフ

（a）民進党は台湾ナショナリズムに頼っていたなら今日の支持は得られていなかった。

（b）現状維持（つまり台湾アイデンティティ）の半分以上の支持を得ないと選挙で勝てない。

（c）民進党は台湾アイデンティティの潮流に乗って勢力を拡大してきた。

総統選挙四半世紀の帰結

- 総統選挙は台湾の民主化の到達点であるばかりでなく、台湾アイデンティティ興隆の重要な起点となった。台湾総統選挙は「台湾のあり方」をめぐる争いである。この選挙を4年に1回繰り返すことにより、「台湾は台湾」「台湾は中国とは別」という「ゆるやかな台湾アイデンティティ」が広がり定着した。
- 中台関係は国共内戦の延長線上から別の次元に移った。最高権力者を自分たちの1票で選ぶ権利を手にした有権者にとって「一国二制度」は魅力がない。台湾の有権者が決定権を握ったことで，中国の対台湾工作は的が絞りにくくなった。中国が統一を進めようとしてもなかなか進まない。
- 総統選挙は「自由と民主の台湾」を国際社会にアピールする機会。台湾は民主的方法で「統一はNO」の意思表示ができる。台湾側の自己防衛の数少ない「武器」，ソフトパワーとなった。